

---

# 会員ナンバー 797

奏手由恵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

会員ナンバー797

### 【Nコード】

N57840

### 【作者名】

奏手由恵

### 【あらすじ】

ふらりとたちよった美容室。流れ作業で髪を切られていくはずだった。

ただ、今日わたしを担当した美容師さんはいつもと違っていて、わたしは秘密を話すことに。

**(前書き)**

軽い自傷行為をおわせる描写があります。(じっさいに行っている描写はありません)

苦手な方はご遠慮ください。

私はぼさぼさの髪を揺らしながら、安さがウリのチエーン美容院へ向かった。店に入ると、マニュアルどおり。全員があいさつしてくれる。

聞き流して、シャンプーをしてもらう。人に洗ってもらうのは気持ちよくて眠たくなるけど、どうもここは、シャンプーがあつていないのか、かゆい。

かゆみの残るまま、今度はカット。今日は女の人だった。メイクは薄く、髪は茶色のロング。この店では珍しい、ハデ系じゃないタイプ。

「今日はどうしますか？」

「髪がかたにつかない程度で、あと少なくしてください。」

私のいつもの注文だ。美容師さんは、ドライヤー片手にわかりました、と答える。

ブローは後ろとサイド中心だった。私は髪が風に揺られるのが大嫌いだ。ドライヤーもまた然り。けれど今日は、風がそんなに強くないブローだったから、まだマシだ。

「じゃあカットしていきますね。」

私の多い髪をいくつものピンで止めていき、内側の髪から切っていく。そして長細いくしでまっすぐに伸ばしう長さをたしかめつつ切る。その繰り返し。

慎重な人だな、と置いていたら、正面にある鏡に映ったその人の顔が、微妙に変化した。それでも手はとまることなく、くしで髪をといている。

「…後ろがちよつとなつちやつてるね。」

その人は不意にそういった。

「くせになつちやつてるのかな？」

落ち着いたその人の声は、茶化して人事だというニュアンスや、押

し付けのおせつかいなやさしさが一切ない、損隘路だった。

言いたくなかったら言わなくていいよ。

いいたかったら話を聞くよ。

そんなことを言われたわけではないけれど。

「じぶんで… やっちやいます。」

私はこの人だから言うことにした。

髪の毛を切ってもらいながら、私たちはこの店では珍しく、話をした。

勉強しているときやしんどいときにやってしまうこと、前髪で隠れるところや、左右どちらにもうつすらとあること、背の高い人が苦手なこと、指摘されるのが、そのときの反応がいやで、長い間髪を切りにこれなかったこと。

ゆっくり、ゆっくり切られた髪の毛が落ちていく。美容師さんは、うなずきながら話を聞いてくれた。

「中側だから大丈夫。背が高い人が見ても、分からない。きにしながらでもいいのよ。」

なぜだか気休めではなく、説得力があると思えた。

「美容師さんの髪、長い。いいなあ…。」

私は本心から、そうつぶやいた。

「のばしてみる？ 似合うと思うよ。きれいな黒なんだから。」

そんなことを言われたのは初めてで、なんだかくすぐったくなった。

「のばしたいとは思ってるんですけど、無理です。髪の毛が多いから変になっちゃう。」

美容師さんは、手を止めた。

「確かにそうね。でも、洗った後の髪の毛の乾かし方をしっかりすると次の日まとまるわ。それに、今みたいにこまめにすいていくのもいいし。」

えあたしは、黙っていた。店内はざわついている。耳には、髪を切る音が再び聞こえ始める。

「…のばせ、ますか？」

「うん、できるよ。」

美容師さんは、にっこり笑った。

「伸ばせるように、だんはつけないでおくね。」

床には、私の一部だったものが落ちていいる。昔より減ってしまったそれを、美容師さんがほうきで集めている。

ここは、人の入れ代わりが激しい。また、会えるかどうかも分からない。せめて名前だけでも覚えていたい。会計のときにそう思って、名札を見た。

苗字が、読めない。

「会員証をお持ちですか？」

その声に、あわててカードをだす。会員ナンバー797。そこに書かれている名前を、その人は少しだけ長く見ていた。

自然な笑顔でカードを返され、私は受け取る。読み仮名が書かれていないこのカード。初対面で読めた人は、だれもない。

「おせっかいかもしれないけど」

その前置きの後、小声だけではつきりした声が続く。

せつかくきれいな髪なのに、もったいないよ。

私はお礼を言つて、店を出た。遠くにマニュアルのあいさつが聞こえる。

外に出て、髪に手をやる。いつものようにかきむしりそうになったけど、なでてみた。風が吹いて、軽くなった髪が揺れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5784o/>

---

会員ナンバー 797

2010年10月30日00時53分発行